

社会教育施設としての動物園と市民的運営

A zoo as social education facility and management by the citizens

和歌山大学地域連携・生涯学習センター 地域連携コーディネーター 後藤千晴（ごとう ちはる）

要旨：和歌山公園動物園では、2008年より市民動物ガイドボランティアが教育活動の充実に向けて活動している。動物園の目的の一つである「教育・環境教育」の一端を市民が担う、和歌山公園動物園の社会教育施設としての可能性を考える。

キーワード：動物園、市民動物ガイドボランティア、飼育員、協働

1. はじめに

和歌山市の中心部、国の史跡である和歌山公園内には市営の動物園がある。その歴史は古く、また全国的にも珍しい城郭公園内のこの動物園は、市民に「お城の動物園」として長年親しまれており、年間約5万人が訪れている。2008年、この動物園において、市民参加の動物園活性化事業がスタートした。この事業の一つとして、教育活動の充実に向けた市民による動物ガイドボランティアがスタート、動物ガイドや環境教育、教育支援等の活動を行っており、動物園は「社会教育施設」として活用されはじめている。

本稿では、和歌山公園動物園が果たす社会的役割と社会教育施設としての可能性について、そこで活動する市民ボランティアと行政の協働を通じて考えたい。

2. 日本の動物園

2.1 動物園の定義

日本には動物園を明確に規定している法律はない。しかし博物館法第八条に基づく公立博物館の設置及び運営に関する基準において、自然系博物館の一種として位置づけられている。つまり、日本において動物園は、博物館法の理念に基づいた社会教育施設であると言える。

一方で、世界動物園機構は、「世界動物園保全戦略」で、21世紀の動物園・水族館の使命は「野生動物の繁殖」と「環境教育」の2点であるとした。また、日本動物園水族館協会は動物園が目指す4つの目的として「種の保存」「教育・環境教育」「調査・研究」「レクリエーション」を掲げている。

しかし、世間からはレジャー的な施設という見方が一般的で、教育的な役割の認知度は低いのが現状である。上記の理念や目的を受けて、日本の動物園はレジャー的な施設からの脱却を図り、動物を媒介とする教育研究施設への転換を模索している。

2.2 現実の動物園

2013年6月現在、公益社団法人日本動物園水族館協会に加盟する園館は149(動物園86、水族館63)ある¹⁾。入園者数は、最も多かった1991年度の約6100万人から2000年度には約4200万人へと30%も減少し、現在はほぼ横ばいとなっている²⁾。

一般的に動物園というと、遊び場所、レジャー施設、癒やしを得るための場所というのが現在の日本での認識である。しかし、レジャーの多様化と情報化社会の中で、レジャー施設としての動物園は人々を惹きつける力を失ってきた。また、少子化問題は、子どものための施設として発展してきた日本の動物園にとっては深刻である³⁾。

近年、様々な見直しが進む中、動物園は博物館法の理念に基づいた社会教育施設として「見世物小屋」からの脱却を求められている。折しも、旭山動物園人気から動物園ブームがやってきた。多くの動物園が、動物をより魅力的に展示する努力をし、大人も子どもも楽しめる施設へと変化してきている。しかし、これがブームであればいずれ終わりを迎える。それまでに動物園は、「動物園の本来の役割」を人々に知ってもらおう努力をしなくてはならない。

2.3 今後の日本の動物園

前述のとおり、レクリエーション機能ばかり突出

した現代の動物園が、「動物園の本来の役割」を果たし、社会教育施設として再生するためにはどうすればよいのだろうか。旭山動物園の成功により、行動展示を導入する動物園が日本国内で増えてきたが、当然、予算、人的資源、法令上の制約等により全ての動物園においてそれが導入可能なわけではない。逆に全ての動物園が同じ方法をとる必要性もない。それぞれの動物園が「誰に」「何を」「何のために」「どのように」伝えたいかをはっきりさせることが重要だと考える。地域ニーズの汲み上げ・発掘、伝え方・見せ方の工夫などをそれぞれの方法で動物園の持つ機能を果たし、社会教育施設としての役割を果たしていくことが望ましいと思われる。

3. 和歌山公園動物園

和歌山公園動物園は、1915年(大正4年)に開園したとされる動物園である。これは日本では、恩賜上野動物園(1882)、京都市動物園(1903)、天王寺動物園(1915)について4番目に古い動物園である^{脚注1}。また全国でも3ヶ所しかない城郭公園内にある。現在では珍しい形の動物園でもある。4,639平方メートルの敷地の東西に、童話園(主に哺乳類を展示)と水禽園(主に水鳥を展示)が配置されており、2013年10月末現在、哺乳類12種33点、鳥類22種78点、合計34種111点の動物を飼育している⁴⁾。

飼育職員は2013年10月末現在、和歌山市職員1名、公益財団法人職員7名(うちアルバイト2名)の計8名で、事務は和歌山市まちづくり局まちおこし部和歌山城整備企画課が担当している。年間の予算は約6,500万円で、主なものとしては、飼育等業務の委託料(約3,100万円)、水道費(1,800万円)、飼料費(約1,000万円)などである⁵⁾。入園料は無料であるため、和歌山市の財源からこれらの経費は捻出されている。2011年度より「動物園サポーター制度」を開始し、広く市民や団体から寄附金を募っている。集まった寄附金は動物たちの飼料代や施設の修繕等の経費の一部として活用されている。

和歌山公園動物園は、特に幼稚園や保育園に通う子どもたちに人気があり、和歌山市の中心部に位置

し、年中無休・入園無料ということもあって、週末の親子連れや遠足のほか散歩で気軽に訪れる人も多い。

現在この和歌山公園動物園では、動物園の4つの目的の一つである「教育・環境教育」において、市民による動物ガイドボランティア活動が行われている。

4. 市民動物ガイドボランティア

4.1 発足の経緯

和歌山公園動物園において、2008年に市民参加の動物園活性化事業“わかやまフレンZOOパークプロジェクト”から、わかやまNPOセンターお城の動物園応援隊が発足した。このプロジェクトは和歌山市が公募した「わかやまの底力・市民提案実施事業」にわかやまNPOセンターが提案して採択されたもので、行政・NPO・市民・企業・学校等がそれぞれ得意な分野で参画し、和歌山公園動物園(お城の動物園)の活性化ひいてはまちの活性化に寄与する目的がある。この動物園活性化プロジェクトの事業の一つとして、動物園における教育活動の充実を図るため、市民による動物ガイドボランティア活動がスタートした。

その後、2010年には、わかやまNPOセンターお城の動物園応援隊の一事業だった市民動物ガイドボランティアは、名称を「わかやまフレンZOOガイド」と改め、自分たちが主体となって活動するNPOへと展開している。

4.2 活動目的と内容

わかやまフレンZOOガイドは、「お城の動物園」を楽しく動物や自然を学ぶ動物園にすること、及び、動物と人との調和の取れた関係性を築ききっかけとなるようゆたかな環境や地域社会をつくり出すことを目的としている市民団体である。この目的を達成するために、①動物や自然、環境のことを楽しく学びあう、②動物園や和歌山公園の自然を観察する、③ガイドしたい動物を決めシナリオや資料を作成し、動物ガイドを実施する、④動物園を楽しめるイベン

1 史跡和歌山城保存管理計画書(資料編)第1章第1項 和歌山城史略年表では、1915年(大正4年)4月7日に南の丸に動物園開園と記載されている。一方で、第5項 御大典記念 和歌山公園改修工事五か年計画案では、大正5年4月2日～3日付けの紀伊毎日新聞からの転載で、第五年度(1919年/大正8年)旧南の丸にシカ・サル・水禽の飼養場、小鳥小屋を設置する計画が記されている。1919年2月15日付けの紀伊毎日新聞では、和歌山公園に猿の新宅が出来たと報じられている。

表1 わかやまフレンZOOガイドの活動一覧

活動内容	主催or協力	実施年
市民動物ガイドボランティア養成講座	主催	2008年、2009年
動物いろいろ勉強会	主催	2008年～2011年
他の動物園への研修	主催	2008年、2009年
子どもの日イベント(主催：和歌山城整備企画課)	協力	2009年～現在
夏休み企画「一日飼育体験」(主催：和歌山城整備企画課)	協力	2009年～現在
観察自由研究～よく動物を観察してオリジナル図鑑をつくろう～	主催	2009年～2012年
市民ZOOフェスティバル	主催	2008年～現在
動物園de竹燈夜(主催：竹燈夜実行委員会)	協力	2008年～現在
環境学習プログラム	主催	2009年、2010年
動物園壁画プロジェクト	協力	2009年、2010年
東日本大震災義捐金募金活動	主催	2011年
ヤギの郵便屋さん	主催	2011年
和歌山市内の小学校の学習支援	協力	2011年
きのくに子どもNPO わかやまZOOで動物ウォッチング	協力	2011年
羊毛プロジェクト	主催	2010年～現在
いきものワークショップ	協力	2011年、2012年
動物ガイド	主催	2008年～現在
動物園お花いっぱいプロジェクト	協力	2013年～

トを企画実施またはサポートをするといった活動を行っている。近年では特に動物園での教育活動に重点をおき、学校や地域の福祉関係グループと連携し「学びの活動」に積極的に取り組み、その成果を行政や地域の人々に見える形にするよう努力している。

2013年10月現在、小学生4名、中学生3名、高校生1名、大人15名、合計23名が中心となって活動している。ガイドは月に約1回、定期的集まりイベントの企画や準備を行ったり、動物園にてガイドやプロジェクト活動を行ったりしている。

4.3 動物園職員との協働

わかやまフレンZOOガイドが上記の目的を達成するために欠かせないのが、飼育員および動物園を運営している和歌山城整備企画課との協働である。

わかやまフレンZOOガイド(2010年以前は市民動物ガイドボランティア)はこれまでに、様々なイベントやガイドを行ってきた(表1)。動物園活性化プロジェクト発足当初は、市民の方から動物園側にイベントやガイドを行いたいと計画を立てて協力を依頼する形であったが、2009年度からは、動物園側から教育支援の依頼を市民動物ガイドボランティアが

受けるようになっている。また、教育支援だけでなく、園舎の壁画塗替えや花壇整備のような園内整備等も協働で行っている。これらの6年間にわたる協働は、わかやまフレンZOOガイドと飼育員との関係性にも変化をもたらしている。

4.4 わかやまフレンZOOガイドの想い

わかやまNPOセンターの一事業として市民動物ガイドボランティアが発足した当初、市民が動物ガイドをするにあたり、6回シリーズの養成講座が開催された。この養成講座を受講し現在もガイドを続けているメンバーは、動物がもともと好きで、親しんできた動物園に関わりたいという要望が共通してあった⁶⁾。その後メンバーとして加わったガイドボランティアは、初期の市民動物ガイドボランティアたちが企画し開催した、「オリジナル動物図鑑をつくろう」や「市民ZOOフェスティバル」に参加し興味をもったことが参加のきっかけであった。

このガイドの活動は、来園者との交流を楽しみながら、動物を面白く見るポイントや不思議を探求する楽しさを知ってもらおうというところからスタートした。その想いは回を重ねるとともに野生からの大

使である「動物からのメッセージを伝える」という意識へと広がっている⁷⁾。特にわかやまフレンZOOガイドの約3分の1を占める10代のジュニアガイドたちは、明るく今まで以上にたくさんの人に来てもらえるような動物園にしたい、そのために他の動物園へ視察に行ったり、ほかの団体との共同企画を考えたり、園内整備などを行っていききたいと意欲に満ちている。

また飼育員との関係において、ほとんどのメンバーが、信頼関係が構築され、動物の様子などを気軽に訊けるようになったと感じている。今後は企画や動物園の方向性なども一緒に話し合い、活動していきたいとも考えている。

5. 飼育員の意識変化

2008年に動物園活性化プロジェクトがスタートし、市民が動物園の運営に関わるようになってから、飼育員の意識に変化があったことが見受けられる。

和歌山公園動物園には2013年10月現在8名の飼育員がいるが、そのほとんどは、一般的な人事異動により配置されているだけである。そのため動物飼育に関する専門的知識を持ち合わせているわけでもなく、経験則に基づいて飼育管理を行っている。また小規模な動物園とはいえ、8名の職員では通常業務で手がいっぱい、教育活動に十分に手が回らない状況であった。

市民動物ガイドボランティアが活動を始めた当初、「女性ばかりでパワーがありそう、発想が自分たちとは違う、なにかおもしろそう」と期待を抱く飼育員がいる一方、「動物園をかき乱すのではないか、余計なことをするのはないか、自分たちの仕事が増えるのではないか、なにか面倒臭いことが増えるのではないか」といった不安を抱く飼育員の方が多数を占めていた。しかし、動物ガイドや園内の清掃、壁画の塗りなおし、イベントの企画などを通じて互いの信頼関係が構築されることで、それらの不安は消え、互いに「どんな動物園にしたいか」「どんなことを一緒にやりたいか」を考えるようになった。ともに活動し、このような会話が生まれる中で飼育員は、動物について、また、動物園の意義について考えるようになったという。動物にとっても来園者にとっても良い動物園とはなにか。ただ展示して動物を飼育するだけでなく、動物園が果たす本来の役割、

動物園の本質を理解し考えるようになったという飼育員もいる。これは非常に大きな意識変化である。なぜなら、動物園がその意義を果たす社会教育施設へ生まれ変わっていく一歩につながる可能性があるからである。

6. 和歌山公園動物園の社会的役割と市民的運営

動物園の社会的役割は、第一に生きた動物を通じて「いのちの大切さ」や「人間と野生動物とのつながり」をメッセージとして表現すること、第二にメッセージを受け取った市民が、動物や自然に共感を覚え、動物園に親しみを感じ、自然に何らかの貢献をするきっかけをつくることが重要である。

今後、動物園が社会教育施設として認知されるためには、冒頭で述べた動物園の4つの目的を果たしていくことが重要であるが、和歌山公園動物園において全ての目的を果たすことは、法令上の制約や予算、人的資源においても難しいだろう。条件が厳しい中で、和歌山公園動物園で一番力を入れていくことができるのが「教育・環境教育」ではないだろうか。

多くの動物園では、教育支援や教育プログラムを飼育員や獣医師などの動物園職員が、日常業務の傍らで実施していることが多い。しかし8名という少人数で運営している和歌山公園動物園では飼育員が教育支援や教育プログラムを実施することは難しい。その点を補っているのが、市民ボランティアのわかやまフレンZOOガイドである。これまでに動物について来園者に解説を行う動物ガイドや、1年に1度開催される「市民ZOOフェスティバル」、環境学習プログラム(図1)を飼育員と協働して企画・運営してきたほか、和歌山市内の小学校の授業支援(図2)なども積極的に引き受けている。ただし、わかやまフレンZOOガイドメンバーも全てボランティアであり、時間的制限もあるため、今後教育支援をより充実にするためには、わかやまフレンZOOガイドは、様々な教育活動を行う仲間を増やすこと、独自の活動を発展的に継続させるために、資金集めや運営の形をどのようにしていくかは課題となるだろう。しかし、課題はあるものの和歌山公園動物園においてはすでに教育支援を行う体制ができており、動物園が果たす社会的役割を市民の手によって担うことができると考えられる。

また、市民がこのように協働で参加できる動物園はなかなかないものである。2008年度時点で高校3年生だった1人は、動物ガイドの活動を契機に動物学を専攻する大学に進学した。これは、和歌山公園動物園で活動すること自体が市民にとっては社会教育を受けていることになり、動物園としての役割を超えて、社会教育施設として十分役割を果たしていると考えられる。



図1 環境学習プログラム



図2 授業支援

7. 終わりに

「動物を見るために動物園に来て欲しい。」これは飼育員、わかやまフレンZOOガイドの共通した想いである。動物を見るために訪れる動物園となるためには、和歌山公園動物園が、動物園としての本来の役割を果たしていくことが重要であろう。そのためには、わかやまフレンZOOガイド以外の市民の力添えもまた不可欠である。わかやまフレンZOOガイドがこれまでの動物園での活動に加え、動物園と他のNPOや協力団体とのコーディネーター的役割を果たすことができれば、動物園が果たす社会的役割はより一層大きなものとなるだろう。また、動物園が社会的に果たす役割の一端を市民が担うということは、“市民とともに創る動物園”として全国の動物園運営のモデルとなると考える。

2015年には設置計画から100年を迎える和歌山公園動物園。果たして、どのような動物園となっていくのだろうか。今後のわかやまフレンZOOガイドを含む市民と行政の協働に期待したい。

引用文献等

- 1) 日本動物園水族館協会ホームページ
- 2) 児玉敏一・佐々木利廣・東俊之・山口良雄、「動物園マネジメントー動物園から見えてくる経営学ー」(2013)
- 3) 田中正之、「生まれ変わる動物園ーその新しい役割と楽しみ方ー」、株式会社化学同人(2013)
- 4) 平成25年度収容動物調査票(10月)
- 5) 日本動物園水族館協会年報 平成23年度(2012)
- 6) 松本朱実・川島寛子、「和歌山公園動物園の市民動物ガイドボランティアー市民がつなぐ人と動物、地域の輪ー」、日本動物園水族館教育研究会誌、pp.7-10、2010
- 7) 松本朱実・後藤千晴・川島寛子、「遊んで学ぶ生物多様性ーもっと知り隊！動物&環境プログラム」、日本動物園水族館教育研究会誌、pp.27-31、2011

参考文献

- 史跡和歌山城保存管理計画書(資料編)(1993)
 紀伊毎日新聞(1919年2月15日)
 菊田融、「動物園の社会教育施設としての可能性」、社会教育研究、第26号、pp.43-57、2008年3月
 博物館法